

部 長 松 浦 恵 美
研究主任 本 多 裕 輔
部 員 数 4 2 名

1 研究主題

『英語で思いや考えを伝えあう児童・生徒の育成』
～小中連携を軸とした系統性のある授業づくりをめざして～

2 はじめに

数年来、小・中学校の円滑な接続を目指し、授業での言語活動の内容、指導方法等について検討してきた。令和2年度の新学習指導要領以降、小学校での英語の教科化や中学校での学習内容の増加に向けて、部員の授業力向上や小中学校のさらなる連携が求められるようになった。

小牧市英語教育研究会では、英語を使ったコミュニケーションができる児童・生徒の育成を目指している。特にコミュニケーションの媒体としての英語を、児童・生徒同士の関わりを大切にしながら学ばせることを主眼において研究を行ってきた。今年度、上記研究主題に関連し、授業実践についての情報交換や小中学校の連携を主な活動として研究に取り組みたいと考えた。

3 研究経過

研究主題に沿って、各部員の勤務校において各校の現状を踏まえた実践・研究を進めた。また、それぞれの研究会の時には、部員が目的ごとに班を編成し、話し合い活動を行った。

- | | | |
|---------|------------|--------------------|
| (1) 第1回 | 令和5年4月25日 | 研究テーマ発表、研究主任・副主任選出 |
| (2) 第2回 | 令和5年5月9日 | 情報交換と授業実践報告① |
| (3) 第3回 | 令和5年6月13日 | 小中連携について① |
| (4) 第4回 | 令和5年7月11日 | A L T派遣会社による研修 |
| (5) 第5回 | 令和5年9月12日 | 情報交換と授業実践報告② |
| (6) | 令和5年10月27日 | 尾教研愛日支部英語研究集会参加 |
| (7) 第6回 | 令和5年11月14日 | 小中連携について② |
| (8) 第7回 | 令和6年1月16日 | 情報交換と授業実践報告③ |
| (9) 第8回 | 令和6年2月13日 | 令和5年度のまとめ |

4 研究の概要

(1) 情報交換と授業実践報告

部員を小学校班と中学校班に分け、中学校班はさらに所属学年別に分かれ、情報・意見交換を2度行った。また、小学校・中学校で所属学年を混合した班を編成し、授業実践報告を行った。

情報交換や授業実践報告では、英語を話す活動において指導者が意識するこ

と、ALTとのチーム・ティーチングのあり方、ふり返りの評価のあり方などについて、各校の情報を交換するとともに、よりよい方法のための意見交流を行った。歌やゲームを用いて児童・生徒に英語学習を楽しませることを重視した取り組み、帯学習で話す活動を取り入れている実践、ICT機器の活用、ジャンプの課題のあり方など、様々な切り口から、普段の授業実践について話し合いを重ねた。

(2) ALT派遣会社による研修

ALTによる言語活動の体験を行うとともに、ALTとのよりよいチーム・ティーチングのあり方を考えることをねらいとして、ALT派遣会社より講師管理責任者の方と地域担当者の方を招聘して研修を行った。

研修の中では、ALTとJTEの関係性がどのようになっているかをふり返ることから始まり、道案内の実際の言語活動の進め方や課題設定のあり方についての講話をしていただいた。また、地域担当者の方からは、運用面で困ったときの相談体制についての説明や、派遣会社が制作している教材・動画などの紹介をしていただいた。

(3) 小中連携について

令和3年度より、小中学校それぞれの言語活動のあり方、指導と評価の実際を知ることや、よりよい授業や教材についての理解を深めることをねらいとして、小中連携についての研究を続けてきた。11月に、部員が行った小中連携の授業実践をレポートにまとめ、研究会内での発表会を行った。中学1年生によって制作された中学校の学校紹介ビデオを同一学区の小学6年生が視聴し、それをもとに「中学校でなりたい姿」というテーマでプレゼン発表を行った。

5 今後の課題

主に小中連携を軸とした授業実践を通し、児童・生徒同士の関わりを大切にした取り組みや、小中学校の学習のつながりを意識した取り組みによって、児童・生徒には、より目的意識をもって英語の学びに取り組み、英語で思いや情報を伝え合うことを大切にする姿が多く見られるようになった。また、教研組織として情報交換や授業実践報告を行っていく中で、小中学校の枠組みを超えて、より良い英語の授業のあり方を考え合うことができた。

反面で、いわゆる「中1ギャップ」への対応が課題であることが改めて浮き彫りになった。英語の学びにおける小中連携の仕組みや手立てが整っていたとしても、小学校から英語の学びに苦手意識をもっている児童・生徒にとっては、中学校においても普段の授業で苦勞している様子が伺える。また、異校種における英語の指導方法や指導と評価のあり方についての理解はまだ不十分であるように感じられる。今後も、より良い小中連携を目指すために、教員同士の困り感の共有や事例検討などの工夫を行っていきたい。